2021/06/13　七里教会 子どもの日･花の日礼拝　　最上光宏

**「野の花を見よ」**　　マタイによる福音書 6:25-34

教会の暦によると、今日 6 月の第 2 の日曜日は「こどもの日・花の日」になっています。この行事は、160 年ほど前にアメリカの教会で始まり、明治中頃からから日本の教会に取り入れられた教会行事です。この日は、教会に集う人たちがそれぞれ家にあるお花を持ち寄って、こどもたちを中心とした礼拝を守り、自然を通して神さまの恵みに感謝し、子供たちの信仰の成長を祈ったのです。そして、礼拝後、その花を持って、病院や施設、交番や消防署などを訪問し、感謝と喜びを分かち合ったものです。

少子・高齢化などの影響により、教会に集まる子供たちが少なくなり、また都市化などによって、庭に花を植える家が少くなったこともあって、この行事は次第に下火となり、この行事を行わない教会が増え、ことに、昨年来、コロナ禍の中で、ほとんどの教会が、特別な行事を行うことが出来ない状態になっています。

この「こどもの日・花の日」に、私は子供たちとの合同の礼拝の中で、よく子どもたちに問いかけました。「どうして『こどもの日』と『花の日』が同じ日なのか、分かる？」。首をかしげる子どもたちに、私はいつもこのように説明してきました。「それはね、イエスさまが、子どもとお花を特別に愛されたからだと思うよ。イエスさまは、子どもたちを抱き寄せて『だれでも子供のようにならなければ、天の国に入ることは出来ない』と言われました。また、野の花を指さして、『野の花を見なさい。今日は生えていて、明日は枯れてしまうような野の花でも、神さまはこんなに美しく咲かせてくださる』と言われました。子どもも野の花も、神さまの愛をいっぱい受けて、輝いているのです。イエスさまはそのような野の花と子供たちを心から愛されたのです」と。

今日、ここに子どもたちはいませんが、私たちも、幼子のような心で、ここに飾られた美しい花を眺めながら、イエスさまの語られたみ言葉に耳を傾け、自然を通して示しておられる神さまの愛と、慰めに思いを馳せたいと思います。

今日の聖書の箇所は、イエスさまが語られた「山上の説教」の中のちょうど中央に位置し、「山上の説教」の頂点とも言うべき箇所です。　ここには、「思い悩む」という言葉が 6 回も繰り返し記されています。この「思い悩む」という言葉は、前の聖書では「思い煩う」と訳され、最近出た聖書協会訳の聖書も「思い煩う」になっています。いずれにしても、この言葉は、人間が心の奥深く抱いている心配、不安、悩みなどを意味している言葉です。そういう意味で、「思い悩み」「思い煩い」は、いつの時代、どんな人の心の中にもあって、私たちの心を悩ませていることではないかと思います。

ことに、イエスさまの周りに集まっていた人々は、ほとんど貧しい人々で、色々な病いや障がい、切実な悩みを抱えていた人々でした。そういう人々に、イエスさまは 27 節で「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩むな」(27 節)と言われたのです。

ここには、「食べるもの」と「飲むもの」、「着るもの」についての思い悩みが取り上げられています。普通、私たちは生活にとって最低限必要なものとして「衣・食・住」という 3 つの要素を上げます。食べることと飲むことは、「飲食」として 1 つのことと

して考えられますから、イエスさまの言われたことは「食と衣」の 2 つについてであって、「住」(住むこと)は入っていないのです。このことは、住まいのことまで思いが及ばない極めて貧しい人々のことが、取り上げられていると見ることが出来ます。今の時代もそうですが、当時の社会にも、住む家のない流浪の人々、ホームレスやいわゆる「難民」と呼ばれるような人々が少なくなかったようです。その人々にとっては、住む家のことよりも、まず、飢えと渇きを満たすこと、暑さ寒さから身を守るために、身にまとうものが、最大の課題であったのでしょう。

そういうことを考えると、現代の私たちは、貧富の差が依然としてあるとは言え、まだ恵まれた状態にあると言わなければならないと思います。しかし、それにもかかわらず、「思い悩み」は、今も依然として無くなってはいないのです。今日では、色々な食べ物や飲み物が豊富にある中で、「今日は何を食べようか、何を飲もうか」と思い悩み、外出に際して、いくつかある衣服の中から「どれを着て行こうか」と悩んだりするのです。そしてさらに、より良い住まいを求めて、思い悩む余裕さえあるのです。

人は、無ければ無いで思い煩い、有れば有るで、より良いもの、より多くのものを求めて思い悩むのです。「思い悩み」とは、そのような意味で、際限のないものであり、人が生きている限り、常につきまとうものだと思います。現代の私たちには、さらに職場における複雑な人間関係やいじめ、家庭や周囲の人々とのストレスなど、「思い煩い」は多様化し、また深刻化している面もあるのではないでしょうか。

イエスさまは、ここで底辺に居る最も貧しい人々の「思い煩い」を取り上げることによって、私たちすべての「思い悩む」人たちのことに思いを馳せて、「思い悩むな」と言われたと思います。　けれども、様々なことで思い悩んでいる人に対して、「思い悩むな」という言葉は、どれだけ意味のある言葉なのでしょうか。だれだって好き好んで思い悩んでいるわけではありません。「こんなことで思い悩みたくない」、「いい加減、思い煩いから解放されたい」と思いつつ、あれこれと迷い悩み続けるのが、私たち人間の「悲しい性(さが)」というものではないでしょうか。

しかし、イエスさまは、ただ単に「思い悩むな」とだけ語ったのではありませんでした。「思い悩むな」と語られた直後に、何故か主イエスは「命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか」(25b)と言われたのです。食べ物や飲み物よりも、また衣服よりも、もっと大切なものがある、ということです。それは何か、というと「命」であり、「体」だ、というのです。「命」と「体」は、私たちの存在そのものを表す言葉です。私たちの命は、私たちが自分の力で生かしているわけではありません。私たちの体は、私たちの努力だけで保護され保たれているわけではありません。私たちに命を与え、その命を支えていてくださるのは、天の父なる神さまです。また、私たちに体を備え、その体を支えてくださるのも、主なる神さまです。イエスさまは、この言葉で、「私たち人間は誰でも、神さまによって命を与えられ、体を支えられ、生かされている存在である」ということを示唆しておられるのです。そういう意味において、「命のことで、何を食べようか何を飲もうかと、思い悩む必要はなく、また自分の体のことで何を着ようかと思い悩む必要はない」ということです。最も深いところで、神さまが私たちを支え、神さまが私たちのために思い悩んでくださっているのです。

こういう観点から、イエスさまは「空の鳥」と「野の花」の例を挙げて、それらがどのようにして生きまた育っているか、「よく見なさい」と語るのです。26 節以下に、次のように記されています。「空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは鳥よりも価値あるものではないか。あなたがたのうちだれが、思い悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。」　ここで述べられている、「種を蒔く」、「刈り入れる」、「倉に納める」ということは、農家の男たちの仕事です。猫の手も借りたいほどの忙しい農繁期でも、空の鳥は手伝うこともなく、呑気に空を飛び、さえずることしかしない。しかし、神さまはそのような空の鳥をも支え、養っていてくださる、というのです。興味深いことに、ルカによる福音書の平行記事によると、この「鳥」という言葉は「からす」になっています(12:24)。からすは、何の働きもしないどころか、ごみをあさったり、農作業の邪魔をしたりするような無益な存在です。しかし神さまは、そのような鳥にも命を与え養っておられる、というのです。

そして、28 節以下に「野の花」に関して、次のように語られたのです。

「なぜ、着物のことで思い悩むのか、野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし言っておく、栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の花でさえ、神はこのように装ってくださる」。　ここ記されている、「働き」や「紡ぐ」という言葉は、女性の家事や機を織る仕事のことのようです。「野の花」はそのような仕事を手伝うことも出来ない、と言われているのです。そのような、何の役にもたたない野の花をも、神さまはこんなにも美しく装ってくださる。あの栄華を極めたソロモン王の豪華できらびやかな神殿や街並みの美しさも、野に咲く一輪の花の美しさにはかなわない。神さまは明日には枯れて炉に投げ込まれてしまうような野の花にさえ、今日、こんなに美しく装ってくださるというのです。

ここに、自然の美しさに対するイエスさまの感動を見る思いがします。「イエスは詩人だ」と言った文学者がいましたが、空の鳥のさえずりや大空を自由に飛び交う姿の中に、神の摂理を見、足もとに咲き乱れる野の草花の美しさの中に、不思議な神の愛の御業を見て讃える姿は、ほんとうに感性の鋭い詩人のようです。しかし、イエスさまはただ単に、自然の中に宿っている美しさや、輝きを讃えているのではありません。

30 節の後半に「まして、あなたがたにはなおさらではないか」とあるように、イエスさまは、「空の鳥」や「野の花」支え、それを生かしめている神の愛は、あなたがたにも注がれているのだ。あの何の役にも立たず、明日の命すら分からない小さくはかない「空の鳥」や「野の花」が、神さまによって愛され生かされているなら、神の形に造られ、神に向き合う存在として生かされているあなた方に対して、神さまはどれほどの愛を注ぎ、支え導いてくださることか、と語られるのです。

人間の価値は、それがどれだけの仕事をし、どれだけ役に立つか、という才能や能力や仕事量などによって決められるようなものではないのです。神さまによって必要とされて、生かされ愛されていること。その存在そのものに価値があるのです。

「あなたがたにはなおさらではないか」と語られたイエスさまは、「だから思い悩む

な」と語られ、「あなた方の天の父は、これらのものがみなあなた方に必要なことをご存知である」(32 節)と語られ、「何よりもまず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(33)と言われました。

私たちが「空の鳥」を見て、心が晴れやかになり、「野の花」見て、心癒され慰められるのは、空の鳥も野の花も「思い悩む」ことなく、神の愛と恵みを素直に受け入れ、すべてを造り主なる神に委ねて、喜び感謝しているからなのです。

キェルケゴールというデンマークの哲学者は、「空の鳥・野の花を見よ」という小冊子の中で、「空の鳥・野の花は沈黙の教師である」、また「服従の教師である」と語り、「我々は神の愛と恵みの前に、沈黙して、すべてを主のみ手にゆだねて、主に従うことを学ぶように求められている」と述べています。また「空の鳥・野の花は喜び教師でもある」と述べ、「私たちは、あるがままで神さまから愛され、必要とされ、生かされているのだから、思い煩うことなく、自由な喜びをもって生きようではないか!」と呼びかけています。　これこそ、イエスさまが「空の鳥」「野の花」を指さして、私たちに語ろうとされたことだと思います。コロナ禍の中ですが、私たちもすべてを支配し導いておられる全能の神に信頼し、喜びと感謝をもって主に仕えたいものです。